

平成29年8月31日(木)

老球の細道353号

8月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「戦争が廊下の奥に立っていた」。いつの間にか気がつかないうちに戦争は近づいていることを詠んだ先人の俳句である。今年も72回目の「8月15日」を迎えて、つくづく戦争のない時代に生まれたことを喜んだ。暑さもそれほどでなく、体調も良く、多くのクリニックができた喜んでいたら、29日早朝、突然Jアラート(全国瞬時警報システム)から北朝鮮ミサイル発射の警報。「戦争を知らない子どもたち」のままで終わりたい。

1・テレビ番組から

◆「ほめられて何の得になる。それで怠ればむしろ損だ。けなされて何の損になる。それによって努力するのだから、むしろ利益ではないか」(NHK/先人たちの底力知恵泉『孤高の挑戦者、佐久間象山』) 敬愛する吉田松陰の師匠である。誰もが考えつかないようなことを批判を恐れず言い続け行動した幕末の偉人である。ものすごい勉強家で失敗を失敗と思わない「掛け算思考」(「プラス思考」より前向き)は恐るべし。エジソンも1万回失敗しても「失敗していない。うまくいかないやり方を1万回みつけただけだ」と。

2・読書から

◆「好きだからする。人間はあくまでもこうありたいものです。だから、努力は努力でも、好きになるための努力をすればいいわけです」(千葉康則著『勉強が好きになる話』)

コーチは子どもたちにバスケットボールを好きにさせることが最重要使命。何事も好きで、楽しんで取り組んでいる人にはかなわない。大器晩成の大物は皆そうである。

◆「第一印象で好感を持ってもらえるような選手は周囲からも応援してもらえます。スポーツ選手として成功するということは社会的なことなのです」(鈴木良和『バスケットボールの教科書3・チームマネジメントの基礎』) 挨拶と返事は人間関係の基本中の基本。第一印象を良くする。強豪チームは例外なくこの基本が徹底されている。挨拶と返事のできる子には自然と教えたくなり、声をかける回数が多くなる。その結果メキメキ上達する。応援したくなるチームにならなければ優勝はできない。

3・新聞のコラム等から

◆「甲子園は天才も待っているが、甲子園は努力で磨いた普通を、いちばん待っている」(朝日新聞『天声人語』 故作詞家・阿久悠の言葉) 生涯の目標は普通の選手で強いチーム、卓越したチームを創ること。普通の選手を「努力の天才」に育てること。

◆「普段できないことは、災害のような非常時にはなおのことできない」(朝日新聞・折々のことば) 練習でできないことは試合では絶対できない。「練習は試合のように、試合は練習のように」。この原則を理解しないで、練習のための練習で大切な時間をつぶすチームや選手がいかにも多いことか。これはシェークスピアの3大悲劇よりも悲劇である。

◆「するんじゃなしに、さしてもらえるんです」(朝日新聞・折々のことば・ある棟梁)

仕事は「あいつになら任せられる」というまわりに人たちの信頼と承認に拠る。だからプライドは自分で形づくるのではなく、他者から贈られるものだという。コーチも教えてやるのではなく、教えさせていただいているという謙虚な心が大切だ。コーチが「教え子」と言えるのは「コーチに良い指導を受けた」と言ってくれる人間だけである。